

げんぺいぬのびきのたき

源平布引滝

〔解説〕

寛延二年（一七四九）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛による五段続きの時代物です。平治の乱以後、再興を期す源氏の武将らを中心に人々の思いが複雑に絡み合って描かれています。源義朝の弟義賢の最期を描いた二段目「義賢館」、平家方なれども源氏再興を密かに願う者達を描いた三段目「九郎助住家」がよく知られています。

〔あらすじ〕

平治の乱で源氏を破った平清盛は、源氏の再興を恐れて一族の男子を根絶やしにせんと躍起になります。

木曾義賢から源氏の白旗を預かった小万（こまん）は、平家の兵に追われて琵琶湖に飛び込みます。溺れかかったところを、平宗盛の船に助け上げられますが、源氏方の女と露見して白旗を奪われそうになります。船に乗り合わせた斎藤実盛（さいとうさねもり）が旗を持つ小万の腕を切り落とし、白旗は小万の腕もろとも流れて行きます。

〔瀬尾詮議の段〕 義賢の妻葵御前が身重であったことから、葵御前を匿う九郎助の元にまで詮議が及びます。平家家臣の斎藤実盛と瀬尾十郎(せのおじゅうろう)が、葵御前から生まれた子と見せられたのは、女の腕でした(実は九郎助の娘で、源氏方多田藏人の妻である小万の腕)。もはや逃れられない状況でしたが、実盛が唐の国の故事を引き合いに出してその場をしのごうことができました。

しかし、瀬尾十郎は納得せず陰で成り行きを窺っていました。そうするうちに葵御前は後の木曾義仲となる男子を産みます。そして事の真相を知った瀬尾十郎が再び姿を現すのですが、小万の遺児太郎吉に討たれます。瀬尾は小万の実の父であり、孫に手柄を立てさせ、生まれたばかりの若君の家来をなれるようわざと手にかかったことを告げて息絶えるのです。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

瀬尾詮議の段

うちと出でて行く。

世に連れてかはる住居や憂き思ひ、義賢の御台葵御前、たゞならぬ身の満つる月、かげを隠する一間より、打ちしほれ出でたまひ、

主九郎助綱提げ戻るを太郎吉先走り、

「祖母さん大きなものがかゝった。おれが見付けた、おれが取った」

と小踊りして悦ぶにぞ、

「ア、出かしゃった〜。アレお聞き遊ばせ、御運の鮎をり大きなものがかゝったといな。ドレ見ませうか

親父殿」

「見せうとも〜。イヤモけうといものぢや。恸りすなよ。飛びもはねもせず動きもせぬ。廿四五年ものゝ

人魚、隠すが秘密」

と表へ引立て、

「よつぽどけうな源五郎鮎。驚くまい」

と綱よりもはふり出したは女の片腕。娘の手ともしらすでびつくり、

「ソリヤ見たか。羅生門から奪いに来る。きほひ口でも伯母に見せな」

と仇口いふても、傍へも寄らず、太郎吉はをかしがり、

「デモ臆病な、死んだ手がなんでこはい」

と打笑ふ。

「イヤまた気味がようもない。コレ親父殿、コリヤまあどこから取ってござった」

「されば草津川の下は湖からの入込み。鮎の溜りがあるらうと綱持つてかゝった向ふへ、その肘が流れてくる。孫めが見付けて『取ってくれ』とせがむ。『ア、よしな

いもの』と思へど、手に持ったものが好もしさに、一網くらはして引上げ、握り詰めてゐる白絹を放して見

れどもなか／＼放れぬ。いかなる者の肘ぞ弔ふてもやらふし、第一この絹をばはづしてみたさに持つて戻つた。御台様とそちとして、腕首しつかり持つてゐよ。

力に任せもぎ放さう。サア持つて／＼」

と差付けられ、こは／＼ながら、御台とともに、手をかけて引けどしやくれど放ればこそ、ほつとあぐんで、

「コリヤいかぬわ。いっそ手のうち切り割ろ」

と立つを、太郎吉、

「コレ爺様、おれ放さふか」

と立寄れば、

「ア、おけ／＼。人形の首ぬくとは違ふ。持つた絹を

ばやぶりおろ」

と叱れど聞かず、

「イヤ／＼／＼、あの持つた指を一本づつ放せば放れる」

と大ませ者のわんぱくが手をかくれば、忽ちに五つの指は一度にひらき、白絹わが子へ渡せしは、肘に残る一念の思ひはいとゞ哀れなり。不思議ながらも絹押開き、見るより御台は、

「ヤアこれは源氏の白旗、みづからが家の重宝」

「エ、スリヤこの白旗持つたこの手は」

といふたばかりに九郎助、御台。虫が知らして女房も、

「もしや娘の肘か」

といはず語らず三人が、顔見合せて一時にほつと溜息つくばかり。かゝる折から平家の侍、斎藤市郎実盛、

瀬尾ノ十郎兼氏、仁惣太が訴人によつて葵御前を詮議

の役。村の庄屋付従ひ、

「すなはちこれが九郎助が所。御案内」

と戸口にかけ寄り打ちたゞき、

「お上よりお尋ねのことあり。明けた〜」

とつかふど声。

「さては」

と九郎助、

「コリヤ女房。平家方より源氏の胤を探すと聞いた。

まづ御台様を忍ばせよ。まさかの時はコリヤかう」

と耳へ吹込み奥へ追ひやり門口明くれば、兩人はやが

てうちへぞ入りにける。分けてけにくき瀬尾ノ十郎、

床几にかゝり、

「ナニ九郎助といふはおのれか。木曾の先生義賢が女

房葵といふ孕み女、匿ひ置いたる由これへ引出せ。詮

議することあり」

とてつぺい押しを、少しもひるまず、

「これは思ひもよらぬお尋ね。さやうなお方このうち

には」

といはせも立てず、

「ヤアぬかすな。おのれが甥の矢橋の仁惣太、この瀬

尾へ両度の注進。遁れぬところ白状ひるげ」

「ア、イヤたとへ甥がもうしませうが、この埴生にさ

やうなお方。毛頭覚えござりませぬ」

といひ放せば、実盛。

「ア、コリヤ九郎助とやら悪い合点。当時平家の威勢

をもつて、源氏の胤を胎内まで御詮議。懐妊の葵御前

匿ひあること現在の甥が訴人。サこゝをよつく聞け。

たとへ源氏の胤なりとも、女ならば助けよと小松殿の

情。それにたつて争ふと踏込んで家捜し、ためになる

まい白状」

とことをわけたる一言に、『はっ』と吐胸の思案も出で

ず、是非におよばず手をつかへ、

「なるほどゆゑあつて葵御前をおかくまひもうし、当月が産み月、いまだ女とも男とも定められぬ懐胎、御平産あるまでを私にお預け下され」

と願へば、十郎、

「ヤアしにぶとい親仁め、今日産むか明日産むかとべん／＼と待たふか。胎内まで捜せとある御上意は、腹裂いて見よとある仰せ。裂き役は某。検分はコオ／＼て女ならば助けてくれる。隙とらずはやく／＼」

「アノ懐胎を腹裂けとある」

「オ、サ清盛公の仰せなるわい」

「ホイそれはあんまりお胴慾。一人ならず二人のお命、なにとぞお情で当月中を」

「イヤソリヤならぬ」

「サアそこをどうぞ」

「ヤアしちくどい親仁め。奥へ踏込み引きずり出し、源氏の胤を絶やしてくれん」

と立つを九郎助、

「ヤレ待つてお慈悲／＼」

と手に縋り歎きとゞむる折からに、にはかに騒ぐ一間のうち、女房の声として、

「九郎助殿々々々々。御台様が気がついた。ちやつと／＼」

と呼びたける。『はっ』と驚きかけ行くを、瀬尾はやがて引捕へ、

「ヤアどこへ／＼。腹裂かれるがせつなさに、産んだとぬかすが合点がいかぬ。まこと産んだが定ならば、そのがきこれへ連れてこい。たゞし踏込み見届けふか。なんとぢやどうぢや」

とせり立てられ、のっ引きならぬ手ごめを見るより、

是非なくくも女房が錦に包み抱きかゝへ、

「果報拙き源の御行末」

とばかりにて涙ながらに立出づる。九郎助はせきにせき、

「コリヤ女房。男の子なればお命がない。エム、ム、女かくく」

と問へど答えず打ちしをれ、詞なければ瀬尾ノ十郎。

「ハア、男子に極った。そのがきこれへ」

ともぎ取るを実盛押さへて、

「イヤ検分は某が役。改めた上お渡しようさん。水子

これへ」

と抱き取り、男子を女子にくるめんと、心配れど目先に瀬尾油断せぬ顔、工面皺面こゝぞ絶対絶命、男子なりとも変生女子と絹引きまくれば、『こはいかに』朱に染まりし女の肘。

「これは」

と驚く実盛より瀬尾はびつくり、

「エこれ産んだか。くくく」

と興覚まし、あきれ果てたるばかりなり。九郎助ぬからず女房引寄せ、

「ヤイこゝなうろたへ者め。木曾ノ先生義賢様の御台が、肘産んだといはれては末代までお名の穢れ。なぜ隠しとげをらぬ」

と真顔で叱れば真顔でうけ、

「サアわしもさう思ふたれど、あんまり詮議が厳しさに、是非なう持つて出ました」

と手爾葉も品もよい手な身がはり、これも娘が忠義かや。邪智深き瀬尾ノ十郎にが笑ひして、

「ム、ハ、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ヤアたくんだり拵へたり。日本はさておき唐天竺にも肘を産んだ例しはない

わい。鳩の戒の売僧めら」

と睨み廻せば、実盛。

「アイヤ例しないとはもうされず。かゝる不思議も世にあること」

「ム、ヤコリヤ聞きごと。かゝる例しがさいづくにある」

「ホ、もうさぬとて御存じあらん。唐土楚国の後桃容夫人、常にあつきを苦しんで鉄の柱をいだく。その精靈宿つて鉄丸を産む。陰陽師占ふて剣に打たす、干将莫耶が剣サこれなり。察するところ葵御前も常に積衆の愁あつて、導引鍼医の手先を借り、全快の心通じ自然と孕めるものならん。ハテあらそはれぬ天地の道理。今よりこの所を手孕村と名づくべし」

とさもありさうにいひしより、今もその名をいひ伝ふ。

さすがの瀬尾もいひ廻され、

「ハテ珍らしい肘の講釈。その旨清盛の御前へ参り披露する。その腕きつと預けたぞ」

「ヲ、申訳は実盛が胸にあり」

「ホウ腹に肘があるからは、胸に思案がなくちや叶はぬハ、ハ、ハ、ハ。先へ帰つて注進」

と表へ出でしがきつと思案し、思い付いたる詮議の種。

「ムそれよ〜」

とうなづいて逸足